

平成29年度 実践研究報告書

中土佐町立久礼小学校 教諭 坂本 和恵

1. 研究の概要

大学院では、小学校教員の英語力を育成するための実践的研究：Classroom English（教室英語）に焦点をあてた研究を、現場の先生方に協力をいただきながら行った。本校は「外国語活動・外国語科」の指定研究校として、先行した研究を行っているが、多くの小学校では教師間の不安が一層増加していると感じている。その要因は、第5・6学年の教科化へ向けての指導・評価の在り方や小学校教員自身が英語（第二言語）を運用する能力に不安があるからと考えられる。学級担任主導で行う「外国語活動・外国語科」では、「Classroom English（教室英語）」の授業内での積極的活用や「教師の英語力の向上」が求められる。だが、実際は授業内での Classroom English（教室英語）の使用頻度も少なく、小学校教員対象の Classroom English（教室英語）研修はあまり行われていないのが現状である。また、学級担任と ALT とのチームティーチング（T.T）がうまくできていない現状もあり、授業での指導を ALT に任せて、英語で ALT との打ち合わせが難しいという状況も少なくない。このような現状を踏まえ、小学校外国語活動やこれからの教科化に活用できる小学校教員を対象にした、英語力向上に向けた取り組み、特に授業改善に向けた Classroom English（教室英語）を育成していく必要があると考え実践に取り組んだ。

2. 実践内容

（1）シャドーイング

- ・毎週金曜日、朝の5分間全教職員で音読と Classroom English のシャドーイングを行う。
- ・ALT の先生に模範になってもらい一緒に練習を行う。
- ・CD を配布しているので個人練習を行うこともできる。

① 読教材のシャドーイング（1分30秒）

教材名「英会話・ぜったい・音読【続・入門編】（CDブック）」

監修 國弘正雄 千田潤一（発行所：株式会社講談社）

② 室英語集冊子のシャドーイング（約4分30秒）

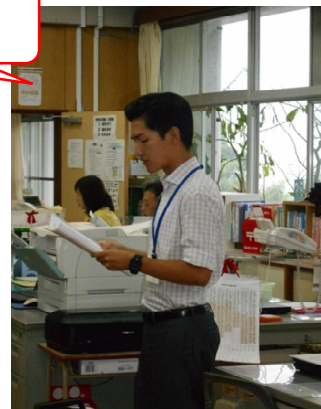
《練習風景》



Make groups of five.

シャドーイング
聞きながら話す。

Make groups of five.



(2) 実践内容の紹介

- ・外国語担当が町内の連絡協議会で教職員対象による実践の紹介を行う。

3. 教職員へのインタビュー調査

(1) 前年度から続けている教職員

- 週に一回でも ALT の先生の英語をみんなで聞くことがよい。
- Classroom English は授業で使うことができた。英語を聞く力がついてきた。
- Classroom English は授業の中で活用ができた。(低学年担任)
- 始業時・終業時に子どもとのやり取りの仕方の練習をしたい。

(2) 今年度初めて実践する教職員

- 4月はなかなかついていけなく不安だったが、次第に雰囲気にも慣れて、知っている Classroom English は言えるようになってきた。

(3) ALT から

- シャドーイングだけでなく、会話を通してコミュニケーションを図っていったらよい。
- Classroom English や生活で使える英語を習得していくとよい。
- 同じシャドーイングをくり返し行うとよい。
- 英語でわからないことがあれば、もっと ALT に聞いてほしい。

4. 実践のおける成果と課題・今後の方向性

【成果】

- 毎週全教職員での5分間練習で英語のシャワーを浴びることで、英語への抵抗感が少しずつ低くなっているように感じる。
- 教職員間でのあいさつなども英語で行ったりする場面が多くみられる。
- 全学年が「外国語活動・外国科」で行った際は、担任が Classroom English(教室英語)で子どもに指示を出したり、説明をしたり、ALT とのやりとりをする場面が多々見られた。
- 担任が英語を話すことで、児童も同じ英語を使うことができるようになり、話すことを楽しんでいる。

【課題】

- 全教職員で行っているので、時間の確保が難しい。
- Classroom English と音読の内容について工夫改善が必要である。
- 毎年メンバーが変わっていく中で、実践の継続の必要性を理解してもらう必要がある。

【今後の方向性】

- ◎週一回のペースの実践では成果もすぐあらわれるものではないので、Classroom English(教室英語)の必要性や、実践が「外国語活動・外国語科」授業をより向上させていけるものだとことを意識して継続的に取り組んでいく。
- ◎今後話し合いながら、「改善版教室英語集冊子」も作成していきたいと考えている。
- ◎教職員間で共通理解を図りながら、今後もこの実践研究を続けていく。